

F
A
T
H
E
R

ワ
カ
ハ
ラ
ダ
イ
ス
ケ

●登場人物

ケネス・グレイ（52）

サラ・グレイ（26）…ケネスの娘

キース・デιβイス（28）…サラの恋人

エリサ・グレイ（26）…ケネスの妻

●舞台構造のイメージ

平面の舞台上には、上手と下手に大きな箱を据え、その合間に小さな箱（椅子代わりのもの）を数点散りばめています。場面転換のたびに役者がこれらの箱を自在に動かして再配置し、多様な空間を表現します。

1 ケネスの家（夜）

一九八〇年代、アメリカ中西部の田舎町にある小さな民家。

ケネス（27）とエリサ（26）が、幼いサラを挟み、談笑しているところから始まる。（サラは舞台上からは見えない）

エリサ「（ささやきながら）寝た？」

ケネス「寝た」

エリサがサラの頬をつつく仕草をする。

エリサ「ふう！ 疲れた」

ケネス「エリサの寝かしつけにはかなわないな。さつきまで泣いてたんだよ。それなのにエリサが抱いた途端、これだ」

エリサ「びっくりしたわよ。サラの泣き声がすごすぎて1マイル先の隣町まで聞こえてきそうで」

ケネス「（苦笑して）パパが抱くと泣くんだよな」

エリサ「なに？ 妬いてるの？」

ケネス「ちよつとだけ」

エリサ「よしよし」

エリサがケネスの頭をなでようとするが、ケネスが振り払う。

ケネス「やめろよ」

エリサ「ちよつと暴れないで、サラが起きちゃう！」

二人がサラの顔を見る。起きてないことに気づき、一安心。そして顔を見合わせて、微笑みあう二人。またサラの顔を覗き込もうとする。

ケネス「サラはかわいいな」

エリサ「私たちの天使ね」

暗転。台詞だけが残り、

エリサ「いつまでも見守るからね、サラ」

2 サラの車(夕)

時を経て二十数年後。成長したサラ(26)が車を運転している場面に変わる。助手席にはキース(28)が座っている。キース、サラに向かって声をかける。

キース「サラ」

サラは反応をしない。

キース「サラってば！」

サラ「うわ！ びっくりした、何？」

キース「いや、ぼーつとしてたからさ。話聞いてた？」

サラ「ごめん、ちよつと考えごととして。何の話だっけ？」

キース「ひどいな、とっておきのジョークを話してたのに」

サラ「とっておきのジョークねえ」

キース「まあ聞いてよ」

キースが身振り手振りを交え、

キース「『ウインドウショッピングをしよう！』ってジョンを誘ったんだ。そしたら、ジョンが『いいところがある』って言うんだよ。で、ついていいたら、ジョンがパソコンショップを見て回ってたんだよね。だから僕は言っちゃったんだよ。……『いや、ウインドウズショッピングじゃない！』ってね」

楽しそうに目配せするキース。サラは黙って運転を続ける。

サラ「え？」

キース「え？」

サラ「終わり？」

キース「うん」

サラ「そう、ウインドウとウインドウズをかけたんだね…」

気まずい間。キースが何事かを言おうとした時、車がガタンと揺れる。

サラ「おっと」

キース「うひゃあ！ し、しひゃ（舌）噛んだ」

サラ「（窓の外を見て）鹿か」

キース「（鹿と言おうとして）しきや！？」

サラ「このあたりじゃ当たり前にいるよ」

キース「そうなのか。ていうか、ずいぶん遠くまで来たね。なんていうかこう…」

サラ「田舎ってこと？」

キース「え、いやいや、そんな。こういう何もない、じゃない！ シンプルな場所、好きだよ」

慌てるキースを見て、サラが表情を変えずにぼつり。

サラ「冗談よ、ごめん。昔はこのあたりも栄えてたんだけどね。今はこの通り。オハイオやミシガンもこんな感じらしいよ」

キース「サラも大変だよな。ここから仕事場まで通ってたんだろ」

サラ「まあ、もう慣れたし…」

しばしの沈黙。

サラ「キース、緊張してる？」

キース「いや、まあそりゃあ初対面だしね。サラも今まで入れてくれなかったでしょ？」

サラ「ごめんね……ちょっと色々あって」

キース「いいよ、気にしないで。見ててよ、爽やか好青年ぶりをアピールするからさ」

歯を出してポーズを取るキース。サラはそれを見てくすりと笑う。

キース「あ、ようやく笑った」

サラ「だって、何よそのポーズ？　ちよつと面白くて」

キース「お父さんに『娘さんと結婚させてください』ってちゃんと言ってみせるさ」

サラ「うん、よろしくね。キース」

3 サラの実家（夕）

シームレスに場転。サラの実家の前に車が止まり、サラとキースが降りて、家の中へと入る。舞台上手が玄関、下手がリビングとなる。

サラ「ただいま。（キースに向かって）入って」

キース「うん」

部屋の奥からケネス（52）が現れる。

サラ「パパ、キースよ。いつも話してたでしょ」

キース「はじめまして。キースです」

ケネス、黙ったままキースを睨む。

キース「あの？」

ケネス、何も言わず、こくりと頷く。

ケネス「……どうぞ」

リビングへ向かうケネス。キースがサラにこつそり耳打ちする。

キース「お父さん、怒ってる？」

サラ「気にしないで」

サラとキースがケネスの後を追ひ、リビングへと入る。ソファに隣り合つて座るサラとキース。その向かいにケネスが座る構図。

キース「(ささやくように) お母さんは？」

ケネス「今はいない」

気まずい沈黙が流れる。

キース「えー、この度はおま、おまね、お招きいただきまして」

ケネス「ああ、いい」

キース「え」

ケネス「そういう建前の挨拶は好きじゃないんだ」

キース「えー……、あー……そうですね」

ケネス「何か用件があるんだろう？」

キース「あるにはあるのですが、今ここでいきなり言うのは……」

ケネス「なんだ。何か人に言えないような用件なのか？ んん？」

ケネスがキースをにらみつける。萎縮するキース。

サラ「ちよつとパパ」

サラがケネスをたしなめるが、ケネスは無視する。

ケネス「仕事は何をしている？」

キース「えつと、フリーランスでシステムエンジニアを」

ケネス「フリーランスか。安定はしてないな」

キース「すみません」

サラ「うちが言える話じゃないでしょ」

ケネス「黙つてろ。……年収は？」

思わぬ質問に固まるキース。苦悶の表情を浮かべながら、

キース「ごま——」

サラ「言わなくていいの！ ちょっとパパ！ さつきから初対面のキースに失礼よ！？ 面接じゃないんだから」

ケネス「いや。俺はお前が連れてきた男がどういう人間なのかを」

サラ「そういうの、やめてよもう！ キースに嫌われたらどうするの！」

ケネス「すまん」

キース「嫌わないよ！ 嫌わないから落ち着いて！」

サラ「もう！ 最悪」

しばしの沈黙。気まずい空気が部屋を包む。何かに気づいたように、サラが立ち上がる。

サラ「あ」

キース「どうしたの？」

サラ「ごめん、車に携帯電話置きっぱなしだった！ ……取りにいったいい？」

キース「え！？」

キース、ケネスの方を気にしつつサラに耳打ちする。

キース「お父さんと僕二人きりになるよ！？ この空気で行くの！？」

サラ「すぐ戻ってくるから」

キース「やだやだ！」

サラ「そんなこと言われても」

ケネス「いいよ、サラいつてきなさい」

キース「えー！？」

サラ「あ、うん。じゃあ。（キースに耳打ちし）すぐ戻るから、我慢して！ 大丈夫！ あと年収も言わなくていいから！」

サラ、まくしたてるように告げ、そそくさと出ていく。キース、気まずそうにケネスの前に座る。ケネスがキースをずっと見つめ続ける。

キース「……年収、やっぱり言った方がいいですか」

ケネス「……いや、もういい」

キース「そうですか……」

微妙な間。ケネスが咳払いし、

ケネス「……緊張しているのか？」

キース「（ぎこちなく笑いながら）そりゃあお父さんとは初めてお会いしますから。少しは」

ケネス「君のお父さんになったつもりはないんだがな」

キース「ああつ！？ いえ、そういうわけでは」

ケネス「まあいいよ。ここに来た用件も大体察しはついてる。言ってくれるのを待つとしよう」

キース「ありがとうございます……」

沈黙。キース、話題を探すように辺りを落ち着きなく見回す。

キース「あー、あのーサラは小さい頃からここで育ったんですか？」

ケネス「そうだ。妻と俺とサラ、三人でな」

キース「そうなんですか、素敵な家ですね。こう、素朴というか昔ながらと
いうか！ いやー、僕もこういう家に住んでみたいなあ。ほら、天井もこんな
に高くて」

ネズミが天井を走る音がする。

キース「ひっ」

ケネス「ネズミの足音だ」

キース「か、壁も白くて綺麗だし」

キースが壁に触ろうとする。

ケネス「触るな！ 崩れるかもしれん」

キース「す、すみません……」

ケネス「本当に住みたいか？」

沈黙。キース、話題が続かず困り果てた表情を浮かべる。すると、ケネスが
キースを指さす。

ケネス「それ」

キース「え」

ケネス「シャツの裾がはみ出てるぞ」

キース「えっあああ！ すみませんすみません」

慌ててシャツを直すキース。

キース「よくサラに言われるんです、服がだらしないって。何やってんだ僕は……」

すると、ケネスがくすりと笑う。

キース「え」

ケネス「俺もよく言われるもんでな。そうか、サラは恋人にもそんな感じなんだな」

キース「しっかりしてますよね。この前もくしゃみをした時に」

ケネス・キース「ちゃんと腕で覆って」

ケネスとキースが目を合わせて少し笑う。

ケネス「予想通りだ」

キース「家でもそうなんですか」

ケネス「まあな。俺が人付き合いが苦手だから、余計につつかれるよ。……顔もそうだが、世話焼きな性格も妻とそっくりだ」

キース「そうなんですか」

ケネス「強くみえるが、実は傷つきやすい。でも優しいから、それを相手に見せない。笑顔で耐えようとするんだ」

ケネスの寂しそうな眼差しがキースを捉える。

ケネス「俺たちは、いつも心配してる」

キースは何も言えず、ケネスを見つめる。そしてサラがバタバタと音を立てて戻ってくる。

サラ「お待たせ！ 携帯電話、車にあった！」

キース「あ」

サラ「……………？ どうしたの、なんかあった？」

ケネス「いや、何もないよ」

グウとキースのお腹の音になる。

キース「すみません……」

ケネス「……夕飯を用意している。食べていきなさい」

キース「ありがとうございます……」

去っていくケネス。その姿をぼうつと見送るサラ。

キース「サラ？」

サラ「あ、ごめんね、不器用すぎるの。しかも過保護だし」

キース「それはちよつとわかったよ。サラのこと、本当に大切なんだなって。君が僕を家に入れたくない理由もわかったけど」

サラの表情が硬くなる。

サラ「違うの」

キース「え？」

サラ「入れたくなかった理由は……それじゃないの」

キース「どういうこと？」

サラ「……見ればわかるよ」

ケネスが料理を持って戻ってくる。

キース「あ、そんな！ 僕が運ぶのを手伝いますよ」

ケネス「あら！ 別にいいのよ、キース。せっかくの客人なんだから！」

空気が凍りついたかのような間。

キース「え……」

キースは啞然とする。黙るサラ。

ケネス「ごめんねえ、うちの人。愛想悪いでしょう？　キースに嫉妬してるのよ、かわいい娘を取られて」

キースの肩を馴れ馴れしく叩くケネス。

サラ「ちょっとやめてよ。キースに馴れ馴れしくするの」

ケネス「えーいいじゃない。別に。せつかくだから私も仲良くさせてよ！」

キース、思わずケネスの顔をまじまじと見つめながら

キース「あの！？　……ケネスさんですよ？」

ケネスは微笑んで答える。

ケネス「いいえ、私はエリサ。……サラの、お母さんよ」

暗転。舞台上に映像が流れる。タイトル「FATHER」の文字が浮かび上がり、続いて現れた「MOTHER」の文字と重なり合う。これは、父であり母でもある男「ケネス」と彼を取り巻く家族の物語。

4 サラの実家リビング（夕）

ケネスとサラとキースが食卓を囲んでいる。キースは困惑した表情。

ケネス「どうしたの？　口に合わなかったかしら」

キース「いえ、そういうわけでは」

サラ「ママ、キースは小食なのよ」

ケネス「あら！　そうなの、キース？」

キースに顔を近づけるケネス。キースは思わず顔をそむけてしまう。

ケネス「照れ屋さんなのね。もっとお話したいのに」

サラ「……ママ、私もお腹いっぱい」

キース「あの、僕も」

ケネス「そう。じゃあ片づけるわね」

皿を持って出ていくケネス。キースとサラが取り残される。

キース「ごめん、少し混乱しちゃって」

サラ「ううん、仕方ないよ」

キース「……詳しく聞かせてもらっていいかな」

サラ、神妙にうなづく。

サラ「私が物心ついたときには、パパはあの状態だったの」

キース「うん……」

サラ「私の中では、パパはママでもあった。それが普通だと思っていた。そうじゃないと気づいたのは……いつからだっただけ」

キース「……サラの本当のお母さんは？」

サラ「私が三歳くらいの頃に病気で亡くなったって。本当のママとのことは正直覚えてない。確かなのはパパが、それ以来ずっとママを心に宿し続けているってこと」

キース「なんだよ……それ」

キースが頭を抱える。

サラ「ごめん、ずっと言い出せなくて」

キース「サラ、わかっていると思うけど、ケネスさんは普通じゃない。病院に連れていけないのか？」

サラがその言葉を聞いて、思わず立ち上がる。

サラ「連れていけるわけじゃないよ！ 知ってる？ 心療科ってすごく高額なんだよ？ 満足な保険にも入れないこんな貧乏な家で払えるわけない。それに……」

サラは一瞬口ごもり、あきらめたようにつぶやく。

サラ「パパは、本当に愛している。自分の中にいるママを。それは私にとってもそう。……昔付き合ってた人がいてね。パパと会わせただ」

キース「うん」

サラ「その人の言葉が忘れられないの」

キース「……なんて」

サラ「気持ち悪い、だつて。怪物を見るような目でパパを見てた。私にはそれが耐えられなくて……」

キース「サラ……」

沈黙するキースとサラ。その背後に現れるケネス。二人は気づかない。ケネスは落ち着かない様子で二人に恐る恐る声をかける。

ケネス「お邪魔？」

サラ・キース「うわあ！」

サラとキースが離れる。

サラ「もう！ 急に声かけないでよ」

ケネス「ごめんごめん。でも入ったら二人とも辛気臭い顔してるからびっくりしちゃつて」

サラ「別に、辛気臭い顔だなんて」

キース「あの、ケネス……（サラの顔をちらりと見て）エリサさん。どうされたんですか？」

ケネスの顔がパツと輝く。

ケネス「そうそう！ みんなで遊ぼうと思ったのよ！」

サラ「ええ？」

ケネス「せっかくキースがきてくれたんだもの。おもてなしたいじゃない？ 私もキースと仲良くなりたいし」

サラ「ママ、ごめん。今はそういう空気じゃないの」

キース「いいですね、ぜひ遊びましょう」

サラ「えっ？」

ケネス「いい返事！ じゃあちよつと待ってて、色々持ってくるから」

ケネスが去っていく。

サラ「キース、いいの？」

キース「いいんだ。サラ、さつきはごめん」

サラ「え？」

キース「普通じゃないって言ったこと、軽率だった。サラにとって、お父さんも……お母さんも大切な両親なのに」

サラ「ううん、私も言い出せなくてごめん」

キース「僕はまだケネスさんやケネスさんの中にいるエリサさんのことをよく知らない。それなのに、否定するのは良くないよな」

微笑むサラ。

サラ「キース、ありがとう」

ケネス「お待たせ」

ドタドタとケネスがやってくる。手にはボードゲームの数々。

キース「多っ！」

ケネス「物置から色々引っ張り出してきちやったわよ」

床にボードゲームを置くケネス。

キース「すごい、色々あるんですね」

サラ「あ、懐かしい。これ小さい頃によく遊んだトランプだ。クマ柄の」

ケネス「トランプにする？ いいわよ。よく三人で遊んだものね」

キース「三人……」

キースが反芻すると、ケネスが微笑む。

ケネス「サラはね、昔は人見知りだったから。小さい頃は家でよく私たちと遊んだの」

軽快にトランプをシャッフルするケネス。

キース「羨ましいです。自分は家で親に遊んでもらったことなんてなかったですから」

ケネス「ええ？ そういう家もあるのね」

サラ「まあまあ。で、何して遊ぶ？」

ケネス「そうね、神経衰弱でもする？」

サラ「（呆れて）言うと思った！ ママ、本当に好きだよ。小さい頃からずっとやってたもん」

ケネス「サラ、いつも私に負けてたもんね。ギャンギャン泣いてたのが懐かしいわ」

キース「神経衰弱かあ、苦手なんだよな」

サラ「付き合ってたげてよ」

ケネスがトランプを並べていく。

ケネス「さらに！ 今回は一つルールを決めます！ 負けた人たちは勝った人の言うことを必ず聞くこと！」

サラ「え、何それ！」

ケネス「そこ、文句言わない。さあ行くわよー」

陽気な調べと共に神経衰弱ゲームが始まる。サイレントで演技が進み、三人の弾むような笑顔が流れる。ゲームの後半から台詞が挟まれる。

ケネス「これとこれ！ あーもう！」

サラ「（カードをめくりながら）これと…これかな？ ……あ！ 違った」

キース「え、これとこれじゃん」

キースがペアを組む。

サラ「え、キースすごい！」

キース「次は……」

キースがまたカードを二枚めくる。連続でペア。

サラ「あ、連続だ」

ケネス「嘘！ 逆転されたかも」

キース「静かにして。次は……」

キースが真剣にトランプを見つめる。ケネスがサラに耳打ちする。

ケネス「キースくん、負けず嫌いの？」

サラ「ああ見えてゲーマーだからね」

キース「これだああ！」

キースがさらにペアを組む。

サラ「すつごーい！」

キース「エリサさん。負けた人は勝った方の言うことを聞くんでしたっけ？」

キースが眼鏡を持ち上げて、にやりと笑う。

キース「僕——勝っちゃいますよ」

サラ「うわ、腹立つ」

沈黙するケネス。やがてキースに微笑む。

ケネス「キース。まだカードは残っているよ」

サラ「え、パパ？」

ケネス「まだ勝負は終わっていないのに勝ちを確信か。愚かだな」

キース「な、何を！」

ケネス「めくってみるといい」

キースが二枚めくる。外れだった。

キース「くそっ」

ケネス「次は俺の番だな。見えているといい」

サラ「いや次、私なんだけど」

ケネス「いくぞ！」

ケネスがカードをめくる。ペア成立。続けて流れるようにめくりペア成立。ケネスがキースを見て、にやりと笑う。

そして、さらにカードをめくり——

キース「さ、三連続だと！ 馬鹿な……！？」

ケネス「これで並んだな」

キースが悔しさのあまり、髪をかきむしる。

キース「くそ！ でも四連続なんてあるはずがない！」

ケネス「ふふふ、いい顔だ」

サラ「なんか私置いてけぼりなんだけど」

ケネス「俺が最後に選ぶカードは……、これとこれだ。めくってペアなら俺の勝ちだな」

キースがごくりと唾を飲む。

キース「めくって……ください」

ケネスがカードをゆつくりとめくる。心臓の鼓動が聞こえてくるような緊張の瞬間……。

サラ「はやくしてよ」

サラがさつさとカードをめくる。

キース・ケネス「ああ！」

サラ「あ、パパの勝ちだね、おめでとう」

ケネス「サラ、男の勝負を何だと思っているんだ」

サラ「うるさいなあ、私眠くなってきたんだもん。はやくシャワー浴びたい」

ケネス「もう、そんな時間か」

サラ「キースも泊まるしね」

キース「え！ そうなの？」

サラ「このあたり夜寒いよ？ いいよね、パパ」

サラがケネスに目配せする。

ケネス「そうだな。泊まっていくといい。寝床の準備もしないとな」

キース「い、いいんですか？」

キースが喜ぶように顔を見せる。ケイジもふつと微笑み、

ケネス「敗者は黙つてもてなされてなさい」
キース「あ、くっそ！」

ケネスが笑いながら去っていく。

サラ「ごめんね。パパ、ああみえて、負けず嫌いなものよ。そういうところ、キースとちよつと似てるかも」
キース「似てる……か」

キースが感慨に耽つた顔をする。

サラ「どうしたの、キース」

キース「いや、なんだかうれしくて。サラ、ケネスさんとエリサさん、すごくいい人たちだね」

サラ「え……」

キース「少しのやり取りだったけど、わかったよ。僕はケネスさんともケネスさんの中にいるエリサさんとも、うまくやっているといると思う」

サラ「本当！？」

サラが嬉しそうに身を乗り出す。

キース「ゲームをしたり、冗談をいいあったり。なんていうか、すごく楽しかったんだ。こんなこと、僕は今まで経験したことなかったから」

寂しそうな顔を見せるキースに、サラが手を差し出す。

サラ「そう言ってもらえて嬉しい。家族になれたらいいね」
キース「うん」

キースとサラが手を繋いでリビングを出ていく。
別の出口からケネスが一人出てくる。ここで物語はシームレスに場面転換する。

5 サラの家の前（夜）

雪が降る空を見上げるケネス。ケネスとケネスの中にいるエリサの会話。観客からは独り言のように見える。

ケネス「寒いわね」

ケネス「寒い方がいい、頭がはつきりするんだ。ここが現実だつて理解できる」

虚空を見つめ、目を細めるケネス。そこへ心配そうな面持ちのサラがやってくる。

サラ「パパ、ママ。何してるの？」

ケネス「あら、サラ。起きてたの？」

サラ「うん。シャワーを浴びて寝ようと思ったんだけど……。窓からママたちが見えちゃつて。どうしたんだろううって」

ケネス「ちよつとね、考え事をしてたの」

サラ「考え事……？」

ケネスが微笑みながら頷く。

ケネス「ああ、これからのことだ」

サラ「それって、私とキースの話？」

ケネス「そうだな。それもあるな」

ケネスの寂しそうな表情を見て、サラの顔が曇る。

サラ「パパ、ママ……大丈夫？　様子が変だよ」

サラがケネスの顔を覗き込む。ケネスが両手でサラの頬をなでる。優しく慈愛に溢れた手つき。

ケネス「大丈夫よ。ふふ、こうしていると昔を思い出すわ。大きくなつたわね」
サラ「ちよつと、急に何」

サラが恥ずかしそうに笑い、ケネスの手をどかす。

ケネス「ねえ覚えてる？ 昔、一緒に雪だるまを作った時のこと」

サラ「覚えてるよ。小さい頃は毎年、一緒に作ったよね。パパと一緒に雪をかき集めて、私より大きい雪だるまを作ってたさ」

ケネス「そうね。そして家に帰って、私が作ったあったかいスープを飲んで……貧乏だけど、幸せだったなあ」

サラ「ママ……」

ケネスは微笑みながら、サラを見つめる。

ケネス「……ねえ。サラはキースと家族になりたいの？」

沈黙。ややあつてサラが神妙に頷く。

サラ「……うん。キースは、大事な人だから」

ケネス「……そう。わかったわ」

サラ「ねえ、本当に大丈夫なの？」

ケネス「大丈夫だってば。さ、早く寝なさい」

サラ「わかったけど……、ママたちも早く家に入りなよ」

サラが去っていく。一人残されるケネス。ケネスの表情が変わる。

ケネス「だって。どうする？」

ケネス「俺は……認めてもいいと思ってる」

ケネス「へえ、あなたがそういうなんて珍しいわね。そんなにトランプが楽しかった？」

ケネス「違う。それだけじゃない。話してるだけで伝わってくる。キースは……、サラを本当に大切に思ってくれている気がするんだ」

ケネスが路上にある岩に座る。

ケネス「ふーん」

ぽつりと呟く。

ケネス「本心？」

ケネス「ああ、本心だ」

ケネス「楽になりたいだけじゃないの？」

ケネス「違う、そうじゃない！ それにサラももう大人なんだ。あいつが選んだなら、俺はもう見守らなくても……」

ケネスが沈黙し、長い間が続く。うつむき、その表情は見えない。

ケネス「ダメよ」

顔を上げるケネス。決意を秘めた表情。

ケネス「絶対にダメ。男なんて結婚すると豹変するものなのよ。殴って、蹴って……殴って、蹴って……殴って！ 蹴って！！ ああ！ 恐ろしい恐ろしい！ それでもしサラが死んだらどうするの？ あなたひとりぼっちよ？ 私たちがサラを守らなくてどうするの！？ ねえ、どうするの？ ——どうするって聞いてるんだよ！？」

息を切らすケネス。頭を抱え、苦し気に呻きながらぶつぶつと何事かを呟く。そして顔をあげ、決意を込めた一言。

ケネス「渡さない、絶対に」

暗転。

6 サラの家の前（夜）

明転すると、キースがノートパソコンを叩いている姿。

キース「やっぱりこのあたりにはないか」

頭をかきながら画面をスクロールするキース。その後ろからケネスが現れ、画面を覗き込む。

ケネス「仕事か？」

キース「はい、まあ。（ケネスに気づき）うわあ！？ ど、どうしたんですか？」

ケネスの手には二つのコーヒーカップ。

ケネス「君とゆっくり話がしたくてね」

ケネスがゆっくりとキースの前に座り、コーヒーを差し出す。

ケネス「サラには買い物を頼んでいる。今は――三人だけだ」

ケネスがコーヒーを啜る。キースも緊張した面持ちでケネスを見つめる。一息つくとケネスは優しく微笑み、キースを見つめる。穏やかなエリサの表情。

ケネス「サラはね……、今でこそあんだけど、昔は泣き虫だったの。私たちにベツタリでね」

キースがコーヒーに口をつける。

ケネス「俺とエリサとサラ、三人で小さいベッドに詰めて寝ていた。サラは夜泣きがひどくてね、急に起きて、ベッドから飛び出るんだ。『ママ、パパ、どこ！？』ってね。――寝ぼけていたのね。そのたびに私たちはベッドから出て、サラを抱きしめていたのよ」

ケネスが懐かしむ顔で天井を見上げる。やがてケネスの言葉は熱を帯びていく。

ケネス「ああ、いまでも思い出せる。走るのが大好きでいつも庭を走り回っていたサラ、トランプで遊んでケラケラと笑っていたサラ、ごはんを口いっぱいに頬張って幸せそうにしていたサラ。私たちの天使のサラ」

キース「あ、あの」

手でキースを制するケネス。そして厳しい表情でキースを見つめる。

ケネス「……キース。このあたりが昔何と呼ばれていたか、君は知ってるか？」

キース「ラストベルト」

ケネス「さすがに勉強しているな。赤く錆びた忘れ去られた地。俺は昔、この工場で働いていたが……時代と共に切り捨てられた。それから一日を生きるのに必死な日々だ。家族だけは死なせない、守り抜く。そう願ってね。だが、あの日――」

コーヒークップを持つケネスの手が震え、様子がおかしくなる。キースが声をかけようとする、急にニコリ笑って微笑むケネス。

ケネス「キース」

キース「はい」

ケネス「ゲームで負けた方が勝った方の言うことを聞くルールだったわよね」
キース「そ、そうでしたね！ なんでも言ってください」

ケネス、有無を言わさぬ強い口調で

ケネス「サラと別れなさい」

キース「（絶句して）――なんで」

ケネスは立ち上がり、キースの前に手を置いて語りかける。

ケネス「サラは私たちが守らなければならない。そう決めたの。今までサラに言いよつてきた男には皆、あきらめてもらったわ。穏便にね。どんなに良い人に見えても結婚すると変わるものなの。殴って、蹴って……。殴って、蹴って！ 殴って、蹴って！ ねえ、あなたのせいでサラが死んだらどうするの」

キースの肩を掴むケネスの手がみるみる強くなる。苦悶の表情を浮かべるキース。その表情は恐怖にゆがむ。

ケネス「答えなさい！！」

キース「う、ああ。やめてよ、お父さん」

ケネス「私は……。俺は……。お前の父親じゃない！」

キースがケネスから逃れると床に倒れる。苦しそうに胸に手を当てて、息が荒くなる。そのキースの胸ぐらを掴むケネス。

ケネス「さあ、サラと別れなさい！ 別れろ！！」
サラ「パパ！！」

サラが現れ、ケネスをキースから引き剥がす。

サラ「なんでこんなことをするの！？」
ケネス「サラ、聞くん。これはお前のためなんだ」
サラ「私のため！？ そんなわけないじゃない！ こんなただの独占欲だよ……！ あなたなんて……大嫌い！！」

ケネス、それを聞いて立ちくらんだかのようにふらつく。そして、不気味に笑い出す。

ケネス「嫌い……嫌いだって。ふふふ、何してるのよあなた。私だけじゃなくて、今度はサラにまで。父親失格ね」

ケネス、床に頭をこすりつけてガンガンと打ちつける。

ケネス「父親失格、失格、失格！！！ お前のせいで、お前のせいで……！！」

ケネスの暴動を啞然と見つめるサラとキース。

ケネス「お前に私は殺されたんだ！！！！」

ケネスが叫び、そして糸が切れたように倒れ込む。暗転。

7 サラの実家リビング（夜）

キースがリビングで神妙な顔で座っている。そしてサラが帰ってくるのを見て、立ち上がる。

キース「サラ！！ ケネスさんは……」

サラ「意識は少し混濁してるけど……大丈夫。しばらく入院することになったみたい」

キース「そうか。僕のこととは言わなくていいからね」

サラ「うん、ごめんね…キース」

二人の間に沈黙が訪れる。

サラ「私たち、やっぱり別れた方がいいと思う」

キースがサラに近づく。

キース「どういうこと？」

サラ「こんな狂った家にキースを迎え入れようだなんて、無理だった。キースを傷つけるくらいなら私は……」

キース「サラ！」

キースがサラを抱きしめる。

キース「それ以上は言わないでくれ。君は幸せになるべき人だ」

サラ「なんでそんなことが言えるの……？」

キースがサラをまっすぐに見つめる。

キース「君は愛されてるからだ。どんなに歪な形であろうと君は愛されて、幸せになってほしいと願われて育った人だろう？ だからそんなことを言わないでくれ」

サラ「なんでそこまで言えるの？ パパはキースにあんな酷いことをしたんだよ？」

キースがかぶりを振る。

キース「サラ……僕はケネスさんから悪意を感じない。むしろ、苦しんでいるように見えたんだ」

サラ「苦しんでる？」

キース「うん。ケネスさんはきつと僕たちに何かを隠している。きつとその秘密がケネスさんを苦しめているんだと思う」

サラ「秘密って、もしかして……」

キース「お前に私を殺された。ケネスさんはそう言っていた。その言葉がどうにもひつかかつてる。あの意味、サラにはわかる？」

少し考え込むサラ。

サラ「わからない、でも。パパの部屋に行けば何かわかるかも」

キース「どういうこと？」

サラ「パパは絶対に自分の部屋に私を入れなかった、あそこなら何かがあるかも」

キースとサラは頷く。シームレスに場転。

8 サラの実家・ケネスの部屋の前（夜）

サラ「ここがパパの部屋」

キースが扉を開くマイムを行う。だが、開かない。

キース「くそ！ 開かない、そりやそうか」

サラ「どいて」

サラが思い切り扉に蹴りを入れる。扉が無理やり開く音。

サラ「開いたよ」

キース「君、たまにすごいね」

サラとキースがケネスの部屋に入る。シームレスに場転。

9 サラの実家・ケネスの部屋（夜）

サラとキースがケネスの部屋に入った瞬間、舞台の仕掛けにより、紙屑などのゴミが舞台上に散乱し、異様な光景が明示される。さらに、うす暗い照明と、役者の表情と演技によってその部屋の凄惨さが表現される。

サラ「何……これ」

キース「サラ。本当にここがケネスさんの部屋なのか？」

サラ「そのはず……でも」

キースがサラの肩を支える。

キース「きつとここに何かがあるはずだ。探してみよう」

サラとキースがケネスの部屋を探すようなマイムを行う。部屋は足場の踏み場がなく、埃だらけで時々せきこむ。キースが床に落ちた本に気づき、手に取る。表紙に触れ、つぶやく。

キース「この傷は……ひつかいた跡なのかな」

サラがキースを呼ぶ。

サラ「キース、これ！？」

サラが一枚の写真を手に取り、キースを呼ぶ。キースが写真を覗き込む。

キース「これは、小さい頃のサラとケネスさんと……本当のエリサさん？」

サラ「ママの顔、塗りつぶされてる」

キース「ケネスさん、どうして」

混乱するサラにキースが先ほど見つけた本を出す。

キース「サラ、僕もこれを見つけたよ」

サラ「これ、なに」

キース「日記帳だ。表紙に……エリサ・グレイと書かれている」

サラ「ママの日記？」

キースがこくりとうなづく。サラが日記を受け取り、ゆつくりと開く。一枚、一枚を開くたび、二人の顔は青ざめていく。暗転。

10 病院（昼）

明転すると、ケネスが入院している病院の病室が映る。ケネスがベッドに横たわり、窓をぼうつと見つめている。そこへサラとキースが入ってくる。ゆつくりと二人に顔を向けるケネス。力ない表情で口を開き、

ケネス「すまない」

サラとキースは何も言えず立ち尽くす。

ケネス「薬の影響かな。今は気が落ち着いているし、エリサも見えない」

ケネスに促され、サラとキースがベッドそばの椅子に座る。

ケネス「キース、本当にすまないことをした」

キース「いいえ、僕のことはいいんです。ただそれよりも知りたいことがあります」

サラ「パパ、教えてほしいの。パパの身に一体何が起きているのか。こんなことが起きたからには、もう目をそらせない」

ケネス、黙考し、やがて訥々と語りだす。

ケネス「いつからだろうか。俺はね、俺の中に……エリサが見えるようになった。そして、そのエリサがいつの日か俺の体を借りて喋るようになった」

キース「エリサさんのこと……、自覚されていたんですね」

ケネス「おかしいことだとは気づいていた。だがエリサが消えることは一向になかった。それどころかエリサと自分の境界がわからなくなる一方だ。とつくに狂っていたんだ、俺は」

サラが日記帳を取り出す。

ケネス「それは……」

サラ「パパの部屋から見つけたの」

ケネス「読んだのか」

キース「すみません。改めさせていただきました。……ケネスさん、あなたはサラにエリサさんのことを病死だと伝えていました。でも、本当は」

言い淀むキース。ケネスは目を細め、

ケネス「ああ、エリサは俺が殺したんだ」

時間がさかのぼっていく。場面は物語冒頭のケネスとエリサの会話へ。ここから先はシームレスの場転が連続して展開される。

11 過去・ケネスの家（夜）

ケネスとエリサがベッドで寝ながら談笑している。

エリサ「（ささやきながら）寝た？」

ケネス「寝た」

エリサがサラの頬をつつく仕草をする。

エリサ「ふう！ 疲れた」

ケネス「エリサの寝かしつけにはかなわないな。さつきまで泣いてたんだよ。それなのにエリサが抱いた途端、これだ」

エリサ「びっくりしたわよ。サラの泣き声がすごすぎて一マイル先の隣町まで聞こえてきそうで」

ケネス「（苦笑して）パパが抱くと泣くんだよな」

エリサ「なに？ 妬いてるの？」

ケネス「ちよつとだけ」

エリサ「よしよし」

エリサがケネスの頭をなでようとするが、ケネスが振り払う。

ケネス「やめろよ」

エリサ「ちよつと暴れないで、サラが起きちゃう！」

二人がサラの顔を見る。起きてないことに気づき、一安心。そして顔を見合わせて、微笑みあう二人。またサラの顔を覗き込もうとする。

ケネス「サラはかわいいな」

エリサ「私たちの天使ね。いつまでも見守るからね、サラ」

ケネスの顔が曇っていることに気づくエリサ。エリサが不安げに声をかける。

エリサ「どうしたの？」

ケネス「少し、仕事で気になってることがあつてな」

エリサ「へえ、何？」

ケネス「最近、親会社が工場の海外移転を勧めているらしい」

エリサ「ええ、大丈夫なの？」

ケネス「いや、さすがにうちにまで飛び火することはないと思うが」

エリサ「ならいいんだけど」

ケネス「サラもいるんだ。何とかするさ」

不安そうにケネスを見つめるエリサ。

× × ×

甲高い金属音ともに場転。時間が経過する。ケネスが何者かと会話をする。

ケネス「閉鎖……なんで！？ ……仕事はどうしたらいいんです。娘はまだ小さいのに！ 待ってください、社長！？」

手を伸ばすケネス。だが、やがて諦めて頭を抱える。

ケネス「どうしろっていうんだ……」

× × ×

甲高い金属音ともに場転。時間が経過する。家を出ようとするケネスをエリサが呼び止める。

エリサ「もう行くの？」

エリサも慌ててベッドから出る。

ケネス「早く行かないと仕事がとられるからな」

エリサ「ねえ、あなた。私も働くことにしたの」

ケネス「なんだと！？ 聞いてないぞ。サラはどうするんだ」

エリサ「隣のマーサさんに相談して預かってもらうことになったの。その間に私が――」

ケネス「俺の働きじゃ不満なのか！？」

ケネスがエリサに詰め寄る。

エリサ「そうは言っていないよ！ でも工場が閉鎖して日雇いだけじゃ不安じゃない！」

ケネス「俺にもプライドがあるんだ！ せめて相談くらいしてくれ」

エリサ「知らないわよ！ そんなプライド。とにかく決めたからね！」

ケネス「くそ！ もう勝手にしろ」

出ていくケネスをエリサが沈んだ顔で見送る。

× × ×

甲高い金属音ともに場転。時間が経過する。エリサがテーブルに座っている。そこに帰ってくるケネス。

エリサ「……遅かったわね」

ケネス「仕事に手間取ったんだ。でもな、給金はよかったんだぞ！」

笑いながらエリサに話しかけるが、エリサは沈んだ顔のまま。

エリサ「ねえ、今日なんの日か覚えてる？」

ケネス「え？」

気まずい沈黙が流れる。

エリサ「サラの誕生日よ！」

ケネス「すまん」

エリサ「なんで覚えてないの！？ あなた父親でしょう！？」

ケネス「だけど仕事が」

エリサ「私だって仕事してるのよ！ 誕生日に娘を見ないって、あなた父親失格ね」

ケネス「……何だと？」

エリサ「父親失格よ！」

ケネス「黙れ！！」

ケネスがエリサの頬を平手で打つ。

× × ×

甲高い金属音ともに場転。時間が経過する。ケネスとエリサが向かい合って話し合っている。

ケネス「おい……本気でいつてるのか」

エリサ「冗談でこんなこと言わないわ」

ケネス「俺はこんなに頑張っているのに！ 日雇い労働をいくつも掛け持ちして、お前とサラを支えようとしてるんだ！ なのに離婚！？」

エリサ「こんな収入で何を頑張っているのよ！ 私だってサラの世話をしながら働いているのよ！ あなた最近サラの顔見たことある！？」

ケネス「うるさい！」

ケネスが手をあげようとする、エリサが反射的に顔をかばう。ケネスがそれを見て手を止める。

エリサ「……また殴るの？」

ケネス「くそ！！」

エリサ「優しかった貴方はどこに行ったの？」

ケネス「違う、そうじゃない！　なんでわかってくれないんだ！！」

途端、幼いサラの泣き声が部屋の外から聞こえる。

エリサ「もういや！！！」

エリサがサラから逃げるように去っていく。サラの泣き声が聞こえる中、ケネスが獣のように叫び、机を叩く。泣き続けるサラ。ケネスがサラのいる部屋に向かう。

ケネス「サラ、どうした……。パパじゃダメなのか……。なあ？」

× × ×

甲高い金属音ともに場転。時間が経過する。エリサがテーブルの前に座り、日記を綴りながら泣いて独白する。

エリサ「私はもう耐えられない。成長するサラを見守りたいけど、この苦しみから逃れたい。弱い私を許して。ごめんね、ケネス。ごめんね、サラ」

やがて筆を置くエリサ。椅子を持って舞台上手の出口近くまで歩き、震えながらそこにそっと立てる。やがて椅子の上に立ち、天井を見上げる。

エリサ「――愛してる」

縄をつかむような動きと共にエリサが舞台から去る。椅子が大きく倒れ、縄がきしむ音。

やがてケネスが帰ってくる。テーブルに置かれた日記を読み、みるみるうちに表情が絶望に染まる。そしてエリサが去った方向を見て、悲嘆に暮れる。

ケネス「ごめん……。ごめん……。エリサ……！」

隣の部屋からサラの泣き声が響く中、ケネスは苦しみの中で独り誓う。

ケネス「見守らなきゃ……。俺が――私が」

暗転。

12 病院（昼）

時が戻る。回想前と同じ、ベッドの前に座るサラとキース、ベッドに横たわるケネスの構図。

ケネス「俺がエリサを追い詰め、その結果、エリサは自ら命を絶った。俺が殺したも同然だ」

キース「でもケネスさん自身も追い詰められていた。エリサさんの死はあなただけのせいじゃない」

ケネス「黙れ、お前に何がわかる！　すべて俺の弱さが招いた罪だ。俺が強ければ……エリサを守る男なら今頃こんな」

ケネスが頭を抱える。そして、不気味に笑い出す。

ケネス「本当にバカよね、この人。私を追い詰めて殺しておきながら、その罪に耐えきれなくて逃げて、私を自分の中に生み出したの。滑稽で笑えるわ」

サラ「違う、パパ。もう自分を傷つけるのはやめて」

間。

ケネス「なに言ってるの、サラ。私はママよ」

サラ「違うよ。私は知ってる、あなたもパパなの。パパは罪から逃げたんじやない。むしろ向き合ってきた。だからこそ、パパが自分を戒め続けるためにママを心に抱き続けてきたんだよ」

サラの言葉は熱を帯び、彼女の目には涙が浮かんでいる。

サラ「私はママを知らない。でも、パパがいてくれたから、すごく幸せだった。パパが、ママでもいてくれたから。私が泣いている時も、庭で走り回っている時も、トランプで遊んでいる時も、ご飯を食べている時も……ずっと笑って見守ってくれていた。たった一人で、貧しい生活をしながら、心を犠牲にしてくれた……」

サラがケネスの手を握る。

サラ「パパ、ありがとう」

ケネスの頬を涙が伝う。これはどちらの人格の涙なのか、曖昧に溶け出していく。

ケネス「でも、私は……俺は……ずっとサラを見守らなきゃいけない。それが罪滅ぼしなんだから」

それまで黙っていたキースが口を開く。

キース「ケネスさん、サラさんと結婚させてください」

ケネスの目が驚きで見開かれる。しかし、キースの言葉は続く。

キース「――最初はそう伝えようと思っていました。でもあなたと、サラさんに、そして天国にいるエリサさんに伝えないといけなかった言葉はそんなものじゃなかったんです」

サラとケネスはキースの言葉に耳を傾ける。

キース「ケネスさん、僕はこの命尽きるまでサラさんを守り抜きます。そして、あなたが抱えた罪を、どうか僕にも背負わせてください」

ケネス「罪を……背負う……」

サラ「私たち、家族でしょ」

耐えきれず、嗚咽するケネス。サラとキースはそんなケネスを優しく抱きしめる。暗転。

13 結婚式場控室（昼）

鐘の音が鳴る。現れたのは礼服姿のケネス。鏡を見て、服をぎこちなく整えている。そして、どこか落ち着かない様子で周りを見回している。そこにタキシードを着たキースが入ってくる。

ケネス「おお、キース」

キース「ケネスさん、どうしたんですか。えらく顔がひきつってますよ」

ケネス「いや、柄にもなく緊張してしまつて」

キース、微笑みながら。

キース「大丈夫ですよ、一番緊張してるのは僕とサラですから」

ケネス「そりやそうだ、間違いない」

キースがケネスを誘導し、お互い椅子に座る。

ケネス「サラの結婚式か。こんな日が来るなんて思わなかった」

キース「体調は大丈夫ですか？」

ケネス「問題ない。君とサラが紹介してくれたカウンセラーの方にもずいぶん助けられてる」

キース「それは良かった」

ケネス「お金のことも……なんといいのか」

キース「サラと相談して決めたことです。気にしないでください」

キースがにこりと笑う。ケネス、キースに向き直り、

ケネス「……キース。ずっと聞きたかったことがある」

キース「何ですか？」

ケネス「君はなんでそんなに俺とサラに良くしてくれるんだ？ サラを愛している、本当にそれだけなのか？」

キース、目を逸らし黙考する。

ケネス「君には本当に感謝している。だからこそ、聞きたいんだ」

キース、諦めたかのように息をつき、立ち上がる。

キース「僕は家族に憧れていたんです」

ケネス「どういうことだ」

キース「僕の母は幼い頃に亡くなり、僕は父と二人で暮らしていました。父は……とても怖かった。僕のことをガキと呼んで小間使い扱いし、酒に酔うといつも僕に当たり散らしていました」

キースがタキシードの袖をめくると、ひどく焼けただれた腕があらわになる。思わず息を飲むケネス。

キース「ひどいもんでしょ。笑いながらライターで焙られたんです。暴力の積み重ねで心臓が悪くなつて、車の運転も許されない体になりました」

ケネス「その、お父さんは？」

キース「数年前、アルコールで体を壊して亡くなりました。……父は最後の最後まで僕のことを名前で呼んでくれなかった」

キースが遠い目をしながら呟く。

キース「僕に家族はいなかったんです」

ケネス「すまない、つらい話をさせたな」

キース「いいえ。でも大学でサラに出会い、僕は救われました。サラは僕の境遇を理解し、寄り添ってくれたんです」

ケネス「そうだったのか」

キース「だからこそ憧れました。こんなにも愛しい人と、その人を育ててくれた方と家族になれば、どんなに幸せだろうって。ケネスさん、僕にとってあなたは、僕の理想とする家族そのものだった」

ケネス「俺たちが……」

キースがケネスをまっすぐ見つめる。

キース「これが答えです」

ケネス「ああ、よくわかったよ。安心した」

ケネスがキースの肩を叩く。

ケネス「君ならサラを託せる」

キース「ありがとうございます、ケネスさん」

ケネス「お父さん、でいい」

キース、その言葉に目を潤ませる。そこへウェディングドレス姿のサラが現れる。

サラ「キース、パパ……」

キースとケネス、サラの姿を見惚れて固まる。

キース「キレイだよ、サラ」

ケネス「ああ、まったくだ」

サラがキースの元へ近寄り、キースがケネスまで軽くエスコートする。

サラ「パパ……」

ケネス、言葉もなくサラを抱きしめる。サラも抱きしめ返す。サラの目から涙が溢れて止まらなくなる。笑うケネス。

ケネス「おい、泣いてるのか。まだ式も始まってないぞ」

サラ「だって」

ケネス「もう時間だ。行っておいで」

サラ「うん」

サラがケネスから離れ、キースの元へ。

サラ「パパ……」

向かい合うサラとケネス。今まで共に歩んだ人生を互いに振り返るかのような時間。

サラ「いってきます」

ケネス「ああ、いってらっしゃい」

サラとキースの二人が手をつないで舞台奥へ去っていく。二人を見送るケネス。

ケネス「いつまでも見守るからね、サラ」

それはケネスの中にいたエリサの声なのか、ケネス自身の声なのか。観客からはわからない。ケネス、空を仰いで微笑む。暗転。

舞台上に映像が流れる。タイトル「FATHER」と「MOTHER」の文字が重なり合っていたものから、「MOTHER」がゆっくりと消え、「FATHER」だけが残る。

終